資料３

展示・学習等ＷＧにおける主な御意見

＜１．展示・学習活動に関する御意見＞

（展示活動のターゲット）

○　新たな施設の立地からすると、常設展示では修学旅行で訪れる国会見学者を呼び込んで来館者を確保し、企画展示については、修学旅行生にも見てもらいたいが、別の層を狙っていくことも考えられる。

○　少子化により子どもは減っていくため、修学旅行生をメインターゲットに据えない方が良いのではないか。高齢者で知的好奇心の高い方が少人数グループで美術館や博物館を回るようなケースも増えているので、そのような方々にも来てもらえるよう、展示は広いターゲットで考えると良いと思う。

○　特に常設展については、外国人についてターゲットとしてどう考えるかが重要であり、例えば多言語対応などの取組が必要ではないかと考える。

（展示活動への取り組み方、手法等）

○　ここに来れば日本国憲法の原本などの象徴的なものを見ることができるというシンボル展示は必要である。様々な公文書が出されることにより歴史がどのように動き始めたかというような、資料の奥行をバーチャルリアリティ（VR）やデジタル等によって表現するような展示や、訪れる人に体感的に伝えられるような空間の取り方といった発想も、有効なのではないか。

○　象徴的な文書の展示は国立公文書館の一番大切なところではあるが、我が国の場合、実際のところはなかなか難しい。その点、新たな施設の建設予定地は、国会議事堂、総理官邸、最高裁判所、皇居が見えるという非常にめぐまれた立地であり、その説明の仕方によってはアメリカなどの象徴的な文書に負けないくらいのパンチがある。また、憲法の議論は、国立公文書館の存在価値を国民に理解してもらう良い機会になるのではないか。

○　来館者のうち、中心となるボリュームの多い層は小中高の修学旅行生にならざるを得ないと思うので、そうした客層にとって本当に言ってよかったと思える記憶に残るような展示を用意できれば良いのではないか。

○　小中高生に向けて魅力的なものをつくるということと、文化的な活動が好きな人に向けて魅力的なものつくるということ、これらをどう考えるかがカギになると思う。小学生向けのものをつくって喜ぶのは小学校低学年だけであり、中学生などはむしろ大人向けのものを見たがる。したがって、基本的には、一般の人が格好良い、素敵だ、美しいと思えるきちんとした空間、海外から来た人が見てもクールだと思えるような空間、という視点でつくっていけ

ばよいのではないか。

○　国立公文書館の所蔵物はやはり紙がメインになってしまうので、例えば、魅力的なキーワードを設定し、それを軸にして国立公文書館の資料以外のものも集めてくるということもあり得るのではないか。そのためには、企画のやり方をこれまでと変える必要があり、その運用のための仕組みづくりや空間づくりも考える必要がある。

○　国民の興味を国立公文書館の展示などの活動に向けることが最も大事なことである。マスメディアや SNS を活用した話題づくりの仕掛けにより、「見に行こう」というムードを作ることが必要である。全て国が無料で実施するという在り方では難しいので、入場料を取ってメディアと一緒に事業をやっていくというようなことができるのかどうか。それによって空間の使い方なども変わってくるのではないか。

○　実際にはリピーターはごく限られた数であり、ほとんどの人は一生に１回しか足を運ばないということを想定しつつ、企画展示にどれほどのパワーで取り組むかを考える必要がある。企画展示を１年に４回も開催するには大変なパワーが必要であり、そのためのスペースを確保するのであれば、その展示でお金を稼ぐという覚悟で取り組んだ方が良いのではないか。

（学習プログラム）

○　小学生に対するアプローチとしては、例えば展示室で自分のお気に入りを見つけるなどの学習プログラムを充実させ、冊子を作って先生方に提示したり、国会議事堂を訪れる前の事前学習に国立公文書館の資料も含めたプログラムを入れるなどのやり方がある。

○　以前の修学旅行は先生に生徒がついて行くだけのものだったが、最近では、事前に調べ学習や課題学習を行うところもある。国立公文書館がその対象になるということも一つの魅力であり、考えてみると良い。

○　国立公文書館のユーザーとしてシニア層が相当数いること、自分達の生きてきた時代を追体験できるという意味で高齢者が国立公文書館に思いを寄せる部分が非常に強いことから、シニア層も取り込んだ、より幅の広い社会学習的な学習プログラムについても検討いただきたい。

○　大学生や大学院生が国立公文書館を使用して研究をする素地を形成しておくことは非常に重要であり、大学生・大学院生に向けた専門教育の前のプレ教育のような学習プログラムがあればよいのではないかと思う。

○　国立国会図書館は教育プログラムの開発に力を入れているので、学習プログラムの開発で国立国会図書館と連携して取り組んでいくことも考えられるのではないか。

（施設内見学）

○　修復作業など仕事をしている風景を外から見ることができると、見学コースとしては非常に魅力的なのではないか。

（活動の担い手）

○　内部の人的資源は限られているため、例えば、企画内容に関わる分野の研究者などの外部の専門家を起用してプロデュースしてもらうなどにより、対象者に合わせた広報視点の企画展示などができると良いのではないか。

○　国立公文書館の人材だけで対応することは難しいので、市民や学校の先生などの外部のアイディアをもらって運営していく枠組みをつくってはどうか。外部の人材を取り込む組織を設け、そこで現状の動向を把握したり、それを基にしてテーマを考えたりするような仕組みができるとよいのではないか。

○　シニア層などを念頭に、展示の解説や資料整理のボランティアの組織化ということも考えられるのではないか。

○　公文書の歴史的価値は子どもにはわからないので、そのものを見て感激するということはなかなかないが、具体的な場面で背景的なことを説明できる人がいれば全く変わってくるのではないか。大学をリタイアして何か社会に貢献したいという人は多くいると思うので、そうした人たちに参加していただく道があっても良いと思う。

○　歴史を学んでいる大学生などを起用してボランティアのような形でチームで参加してもらうなどということも考えられるのではないか。

＜２．広報、集客方法に関する御意見＞

（広報、情報伝達の在り方等）

○　ターゲットについては、第１対象、第２対象といったように、情報が伝播していく対象層を作り、情報を持っている人からその他の人へと伝達される設計が必要なのではないかと考える。

○　新しい国立公文書館は、「国のかたちや国家の記憶を伝え将来につなぐ『場』」として、存在意義を伝える施設としていかなければいけない。

○　多くの人に来てもらいたいということもあるが、国立公文書館の役割と存在意義の発信も重要であり、その両立が難しいところ。多く集客することが国立公文書館の役割ではないのだろうから、存在意義の打ち出しということについても丁寧に議論していかなければならない。

○　暮らしてきた世相や時代に応じた世代ごとの切り口というのは有効である。広報するメディアも年代別に対象を切っているので、そのような切り口があれば、雑誌やテレビ番組で広報することもできるのではないか。全体の構成とその時々のメッセージを込めた展示計画を立てていくと良いと思う。（第１回・田中委員）

○　国立公文書館に行くとどのようなものが見られて、どのようなものにアク

セスできるのかということは、大学では全く紹介されていない。ここにはこういう役に立つものがあるのだという情報を大学に入れていくというのは、一つのアイディアだと思う。

○　公文書というものが、例えば歴史、人など、周辺のどのようなことと繋がり得るのか、一度考えてみると良いのではないか。公文書そのものにこだわり過ぎず、例えば文書の修復の仕方を通じてものづくりや手仕事の話を扱ったり、保存のテクノロジーの話を扱うなど、視野を広げて考えてみると、そこに様々な人々を迎える入れるヒントがあるのではないか。

（集客のための工夫）

○　学校団体の場合は、お弁当を食べる場所を見つけるという問題があり、修学旅行などのツアーコースを決める際にその場所の有無が影響する。専用のオープンスペースを設けるか、他のスペースを開放することができるとよいのではないか。できればそのスペースも魅力的な空間であると良い。

○　大学生や研究者向けに、勉強会や学会の分科会のために貸し出しできるスペースがあると、そのような場を通じた連携ができて良いと思う。

○　女性の来館者を取り込むためには、おしゃれなレストランがあった方が良い。50～60 歳代の文化的な活動が好きな女性を想定し、余暇と知的好奇心の両方を満たすことができる場であることが必要であると思う。